

## 歌劇《修道女アンジェリカ》間奏曲

Suor Angelica : Intermezzo (orchestra)

修道女アンジェリカはプッチーニが書いた《三部作》のうちの一作（あと二つは《外套》《ジャンニ・スキッキ》）。1918年にメトロポリタン歌劇場で初演された。舞台はイタリアの修道院。貴族の娘アンジェリカは未婚の母となり、赤子を取り上げられて修道院に入り7年目となる。訪れたおぼの公爵夫人から息子の死を知らされたアンジェリカは、生きるための唯一の希望を失う。この間奏曲は彼女が毒薬を煎じる場面で演奏される。

## 歌劇《トゥーランドット》より

「誰も寝てはならぬ」

Turandot : "Nessun dorma"

プッチーニの死で未完となった《トゥーランドット》の第3幕で歌われる、あまりにも有名なアリア。おとぎ話の時代の中国。氷のような姫君トゥーランドットの三つの謎を解いたカラフは、夜明けまでに自分の名前を当てるよう姫に告げる。北京の街には謎の王子の名前を探すため「誰も寝てはならぬ」という御布令が出される。カラフは、夜明けにはついに姫の愛を手に入れる、と希望に満ちて歌う。

井内 美香（オペラ・キュレーター）

## プッチーニのどの役も理想的に歌う アラーニャ、カリスマの証明

光沢を湛えた潤いのある声で描かれた流麗な線に、強烈に撃たれた記憶がある。「世界三大テノール」が旋風を巻き起こしていた1990年代、アラーニャは現れた。すでにキャリア後半にいた三大テノールにはない、映画スターのような容姿から発せられる、少し憂いを帯びた声の飛翔は、新時代の到来を思わせた。

1996年、アラーニャのメトロポリタン歌劇場デビューとなった《ラ・ボエーム》を客席で聴き、みずみずしい叙情性のたぎりに心を揺さぶられ、夢中で「ブラーヴォ」と叫んだのを思い出す。また、美しいフランス語で洒脱かつ耽美的に歌われるフランス・オペラは、過去の演奏を忘れさせる力があつた。

心配な時期もあつた。短期間にレパートリーを拡大し、劇的な役を手中に収めながら、光沢が激しさに置き換えられ、旋律の流れるような純粹性が失われたように思われた。

しかし、アラーニャのポテンシャルは私の想像を超えていた。《トゥーランドット》のカラフや《オテッロ》にまで手を広げ、声を強く響かせる術を修得しながら、リリックな役柄に必要な柔軟性も、官能的なピアノシモも失わなかった。もちろん、光沢も、潤いも。

だから、プッチーニが書いたテノールのアリアをみな歌う、という離れ業に挑戦して無理がない。表現力の幅が広く、どの曲も持ち味を引き出せる。リヌッチョ（《ジャンニ・スキッキ》）とカラフを同時に歌い分け、それぞれに理想の味わいを提供する。カリスマの証である。

香原 斗志（オペラ評論家）

【注意事項】※プログラムや曲順が変更となる場合がございます。（曲目の変更が生じた際は、曲目変更のお知らせを会場ロビーに掲出いたします。）※携帯電話、アラーム付き時計等の音の出る機器をお持ちの方は、電源を必ずOFFにしてください。 ※お持ちのチケットに記載された座席以外ではお聴きになれません。 ※演奏中・カーテンコールを問わず、会場内での許可のない写真撮影・録音・録画行為につきましては、一切禁止いたします。これらの違法行為がなされた場合は、機材をお預かりし、データを削除させていただきます。退場をお願いする場合がございますので、あらかじめご了承ください。スタッフ以外の方が客席内での写真・動画の撮影および音声の録音等を発見された場合、お近くの係員にお声掛けいただきますようご協力をお願い申し上げます。

表紙写真：Sony Music Entertainment

待ち焦がれたテノール、  
ロベルト・アラーニャ ソロコンサート

降アラーニャ、臨

2024年6月9日(日) 13:30 開演 (12:45 開場)

サントリーホール 大ホール

指揮：三ツ橋敬子

演奏：東京フィルハーモニー交響楽団

# THE GREAT PUCCINI

## プッチーニ没後 100 周年 スペシャル・プログラム

### Programme Notes

#### — 曲目解説 —

#### 歌劇《妖精ヴィッリ》より

##### 「幸せに満ちたあの日々」

Le Villi : "Torna ai felici dì"

イタリア・オペラ最後の巨匠、ジャコモ・プッチーニ (1858-1924)。《妖精ヴィッリ》は 1884 年にミラノで初演された彼のデビュー作だ。すでにプッチーニらしい美しい旋律と、優れた管弦楽書法が見出される。舞台はドイツ、黒い森。都会に行ったロベルトは妖婦に誘惑され故郷の婚約者アンナを忘れる。彼が後悔して村に戻るとアンナは悲しみで死んでいた。彼は裏切られて死んだ乙女の復讐をするという妖精ヴィッリ達の踊りに囲まれ死に至る。このアリアは、帰郷したロベルトが幸せだった日々を思い出し歌うもの。

#### 歌劇《エドガール》より

##### 「快樂の宴、ガラスのような目をしたキメラ」

Edgar : "Orgia, chimera dall'occhio vitreo"

ミラノ・スカラ座で 1889 年に初演された《エドガール》は、荒唐無稽な台本が災いして成功は得られなかった。14世紀フランドル地方。純粋な娘フィデーリアと妖艶なティグラナーナの間で揺れ動くエドガールは、故郷の村を捨て饗宴や戦争に身を投じる。このアリアは第二幕で、退廃した日々で疲れたエドガールが「快樂の宴、ガラスのような目をして、官能に火をつけるキメラ（幻の獣）よ」と歌う。

#### 歌劇《妖精ヴィッリ》より

##### 第 2 幕の間奏曲《夜の宴》(オーケストラ)

Le Villi :  
Parte sinfonica N.7 II Tempo "La Tregenda" (orchestra)

デビュー作《妖精ヴィッリ》は中間部に長い間奏曲がある。曲は「L'abbandono 婚約破棄」と「La tregenda 夜の宴」に分かれており、「La tregenda (魔女達の夜の宴という意味)」は黒い森で踊るヴィッリ達の様子を活写している。

#### 歌劇《マノン・レスコー》より

##### 「栗色、金髪美人の中で」

##### 「何とすばらしい美人」

##### 第 3 幕への間奏曲 (オーケストラ)

##### 「ご覧下さい、狂った僕を」

Manon Lescaut :  
"Tra voi belle, brune e bionde"  
"Donna non vidi mai", Intermezzo (orchestra)  
"No! Pazzo son! Guardate"

第一部後半は《マノン・レスコー》からの 4 曲。1893 年トリノ初演。フランス、アミアンの旅籠前。物静かな騎士デ・グリユーは友人に「恋でもしているのか?」とからかわれ、ここにいる娘達といつ恋に陥るかもしれないよ、と「**栗色、金髪美人の中で**」を歌う。

デ・グリユーはその後、馬車から降りてきたマノンに一目で恋をする。二つ目のアリア「**何とすばらしい美人**」は、「マノン・レスコーと申します」と名乗った彼女の言葉を繰り返し、甘美な思いを歌う。

デ・グリユーはマノンと駆け落ちし、パリで二人で暮らし始めた。だが贅沢に目が眩んだマノンはお財務官ジェロンテの愛人になる。デ・グリユーと再会し愛を確かめ合ったマノンはおジェロンテの呼んだ警官に逮捕され、開拓地アメリカに送られることとなった。有名な**第 3 幕への間奏曲**は、マノンを救い出そうとするデ・グリユーがそれを果たせず悲しみにくれる様子を表現。哀切な美しさがある名曲だ。

第一部最後は、マノン奪回に失敗したデ・グリユーが歌う「**ご覧下さい、狂った僕を**」。

デ・グリユーは彼女と一緒に乗船できるよう懇願し、二人は共にアメリカに旅立つ。

#### — 休憩 —

#### 歌劇《ラ・ボエーム》より「冷たい手を」

La bohème : "Che gelida manina"

19 世紀半ばのパリを舞台に、貧しくて自由奔放な芸術家達 (ボヘミアン) の青春を描いた傑作オペラ。1896 年トリノ初演。クリスマス・イヴに詩人ロドルフォが独りで屋根裏部屋で仕事をしていると、お針子のミミがロウソクの火をもらいにやってくる。可憐なミミに一目ぼれしたロドルフォは、自分の情熱や夢を彼女に語りかける。

#### 歌劇《トスカ》より「星は光りぬ」

Tosca : "E lucevan le stelle"

1900 年にローマ歌劇場で初演された、フランス革命後の動乱時代のローマが舞台のオペラ。革命思想の画家カヴァラドッシと彼の恋人である歌姫トスカ、そして彼女を狙う警視総監スカルピア男爵の間に起こる悲劇を描く。脱獄した政治犯の逃亡を助け逮捕されたカヴァラドッシは、夜明けの処刑を待ちながら、愛するトスカを回想する。

#### 歌劇《蝶々夫人》より

##### 第 2 幕第 2 部の冒頭部分 (間奏曲) (オーケストラ)

##### 「さらば、愛の家」

Madama Butterfly :  
Intermezzo (orchestra), "Addio fiorito asil"

1904 年にミラノ・スカラ座で初演された《蝶々夫人》は、アンチ勢力による妨害で大失敗に終わった。改訂版は三ヶ月後にブレーシャで上演され成功を収める。

明治初期の長崎を訪れたアメリカ海軍士官ピンカートンは現地妻というつもりで蝶々さんと婚礼をあげ、やがて旅立つ。だが蝶々さんはピンカートンの子供を授かり、3 年後もまだ彼を待ち続けていた。**第 2 幕 2 部冒頭部分 (間奏曲)** は、ピンカートンの乗った船が長崎港に帰還したことを知った蝶々夫人が、夫の帰宅を徹夜で待った後の夜明けの音楽である。

だが戻ってきたピンカートンはアメリカ人の妻ケイトを伴っていた。「**さらば、愛の家**」は、蝶々さんがずっと自分を待っていたことを知ったピンカートンが、後悔の念に駆られ歌うアリア。

#### 歌劇《西部の娘》より「やがて来る自由の日」

La fanciulla del West : "Ch'ella mi creda"

1910 年ニューヨークのメトロポリタン歌劇場で初演されたオペラ。ゴールドラッシュ時代の西部、酒場の若き女主人ミニーは、他所者ジョンソン (実は盗賊団の首領ラメレス) と恋に落ちる。ミニーは彼の正体を知っても必死に匿うが、ジョンソンは捕えられる。このアリアでは逮捕されたジョンソンが処刑されることになり、「彼女には自分が生きて自由の身になり、遠くに行つたと言ってほしい」と人々に懇願する。